The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	初期鴎外の翻訳に見られる創作的付加について : 鴎外訳「新浦島」における主人公への感情移入
Author(s)	中, 直一
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2017, 2016, p. 1-10
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/62046
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

初期鴎外の翻訳に見られる創作的付加について

―　鴎外訳「新浦島」における主人公への感情移入　―

中　直一

1　はじめに

筆者は本研究プロジェクトにおいて、これまで、〈鴎外訳「新浦島」に見られる翻訳技法〉と題して、３つの論考を発表してきた。そこにおける研究の主題は、(1)鴎外が翻訳底本の語順をいかなる技術を用いて日本語訳に活かそうとしたか、また (2) そのまま日本語に訳した場合、ともすれば単調な文体になりがちな過去形表現を、どのような技法で滑らかな日本語に訳したか、さらに(3)異文化たる欧米の文物や思考法・習慣等を、鴎外がどのように明治日本の読者に理解し得る形に変容せしめつつ訳出したか、というものであった。すなわち、鴎外の「翻訳技法」を三つの観点から探ることが、これまでの研究の主題であった。

本稿では、もはや「翻訳技法」という次元を超えた、鴎外の創作的付加を主題とする。すなわち鴎外訳の「新浦島」（アーヴィング作「リップ・ヴァン・ウィンクル」）に見られる、翻訳底本にはない追加的文言――しかも翻訳技法上必要あって付加したというものでなく、鴎外が言わば勝手気ままに付加した文言――について検討する。

結論を予め述べるなら、鴎外が創作的に付加した文言は、「新浦島」に関する限り、殆ど主人公リップの心情を鴎外が代弁し、あるいは主人公が置かれた状況をまさに主人公に寄り添う立場から描写しているものである。底本にない文言を勝手に付加することは、翻訳者としては戒めるべきことであり、鴎外も主人公以外の登場人物――たとえば主人公の妻や村人たち――についての描写の部分では、底本にない文言を勝手に付加することは殆どない。しかし、主人公リップを描写する部分においては、案外に鴎外の筆が自由に動き出し、リップの心情を底本よりも強調する形で読者に伝える文言が創作的に付加されているのである。

次節以降、まずアーヴィングの英文を〔参考〕として掲げ、次いで鴎外文庫所収のレクラム文庫版ドイツ語訳を〔底本〕として、そして最後に鴎外の訳文を〔鴎外訳〕として示す。それぞれの書誌情報は、以下の通りである。

・Irving, Washington. *Rip Van Winkle*. In: *The sketch-book of Geoffrey Crayon, Gent.* Cassel & Company, Limited: London, Paris & Melbourne. Z.P. Maruya & Co., Tokio. n.d.（鴎外文庫）

・Irving, Washington, *Rip van Winkle*. In: *Washington Irving's Skizzenbuch*. Uebersetzt, mit Biographie und Anmerkungen herausgegeben von Karl Theodor Gaedertz, Leipzig (Reclam) o.J.

（鴎外文庫）

・「新浦島」『鷗外全集』第１巻（岩波書店、1971）所収

英語・ドイツ語ともに、東大図書館の鴎外文庫から鴎外旧蔵書のコピーを入手した。英語版には全く書き込みがなく、独訳版には鴎外の書き込みがあり、鴎外が独訳から日本語訳を作成したことが強く推測し得る。

本論文においては、引用ページは引用文の最後に括弧にくくって示す。引用文中、点線のアンダーラインは筆者が引いたものであり、鴎外訳における創作的追加の部分を示す。鴎外の訳文からの引用文については、可能な限り原文（岩波版鴎外全集）の旧漢字旧仮名を再現しようと試みたが、筆者が使用するコンピューターの制約上、鴎外全集の表記（とくに旧漢字）を再現し切れなかった箇所がある。また鴎外訳からの引用において、平仮名（ひらがな）のルビは、鴎外全集で元から存在したものである。それに対し、本論文では筆者がさらに片仮名（カタカナ）のルビをも付加した。難読漢字について、筆者なりの読みを付したものである。

２　主人公の発言を創作的に付加

まず検討するのは、鴎外が主人公の台詞の部分――文法用語で言うところの直接話法で書かれた、引用符で括られた部分――において、創作的な付加がなされているケースである。

〔英文〕... "what excuse shall I make to Dame Van Winkle!“ (p. 41)

〔底本〕... „welche Entschuldigung soll ich Frau von Winkle vorbringen?“ (S.68)

〔鴎外訳〕まあ、何と女房に言譯をしやう。扨々（サテサテ）困つた。(p.176)

主人公が酒に酔って寝込んでしまい、目覚めてみれば朝になっている。どうやら野外で一晩寝てしまったらしいと気づき、無断外泊に対してさぞや妻の怒りが爆発するであろうと自問している場面である。妻の怒りを心配する主人公であるが、実はこの時既に、一晩どころか二十年が経過しており、リップは浦島太郎状態になっているのだが、本人はまだそれと気づいていない。妻に断ることなしに、酔って野宿してしまったとしか主人公は考えていない。その独白の部分で、原文では「どうやって妻に言い分けをしよう」と独りごちているだけであるが、鴎外はここに「扨々（サテサテ）困つた」という、弱り切った主人公の心情をより強く読者に印象づけるような文言を付加しているのである。

このように、主人公の台詞の中に、当人の気持ちを代弁するかのような文言を付加するケースは、次の例にも見られる。

〔英文〕"Alas! gentlemen,“ cried Rip, somewhat dismayed, "I am a poor quiet man, a native of the place, and a loyal subject of the king, God bless him!” (p.45)

〔底本〕 „Ach, ihr Herren,“ rief Rip etwas bestürzt aus, „ich bin ein armer friedfertiger Mann, in diesem Orte geboren und ein treuer Unterthan des Königs, den Gott segne!“ (S. 72)

〔鴎外訳〕これを聞いたリツプは、少し慌てた聲で。「何うして私が暴動抔を致しませう。私は此土地の根生ひのもので、王さまの大の信仰者です」と云ひました。(p.181)

二十年の眠りから覚めたリップが、鳥打ちの銃を携えて村人達の集会所に現れる場面である。村の長老が、武器を携行しているリップを見とがめて、暴動でも起こす気かとリップに問いただしたのを受けて、リップが慌てて弁解するのが上記の引用部分であるが、原文では、単に「私はこの土地に生まれた、平穏を愛する哀れなる男で、国王の忠実な臣民です。王に神の御加護あれ」と述べているに過ぎない。暴動云々という具体的なことは原文には全く書かれていない。鴎外は、村人たちに暴徒と間違えられて困惑する主人公リップになり代わったかのように、弁解の台詞の中に、あえて「何うして私が暴動抔を致しませう」と、非常に具体的な文言を書き添えている。

このような台詞を付加した理由は、主人公リップになり代わって鴎外が弁明の言葉を追加的に記述した、というものであると推測し得るが、もう一つ理由を考える必要があろう。アーヴィングの原作はアメリカ独立戦争前後の時代を背景として書かれたものである。主人公リップが銃を持って村の集会所に姿をあらわした行為は――戦争前の平穏な時代ならば、単に猟に行った帰りと受け止められていただろうが――独立戦争終結後まだ騒乱の記憶のさめやらぬ状況の中では、すわ戦時の再来かと思わせかねない危険な行動である。このような背景は、アメリカの読者（そしてまた独訳の読者）には、予備知識として共有し得るものであろうが、そうした状況を実感として持ちにくい明治日本の読者――就中「新浦島」初出誌である『少年園』の少年読者――のために、鴎外は、手短な文言の付加を以て、時代状況を知らしめる一助としたとも考え得る。

もう一例、主人公の台詞の中に見られる鴎外の創作的付加を紹介する。

〔英文〕 Rip bethought himself a moment, and inquired, ".Where's Nicholas Vedder?" (p.46)
〔底本〕 Rip besann sich eine Mimute und fragte: „Wo ist Nikolaus Vedder?“ (S. 73)
〔鴎外訳〕リツプは少し考へて、「ニコラス、ベツタアは何處に居ますか、御存の方はありませんか。」(p.181)

これも上例と同様、村人達と会話の歯車がかみ合わないリップが、旧知の名前を出して村人に問う場面である。底本では、単に友人ヴェッダーの居場所を問うているのみであるが、鴎外訳では底本にない「御存の方はありませんか」という文言を追加し、リップの当惑ぶりを強調している。

以上検討してきた部分は、すべて引用符に括られて示されたリップの発言の部分に見られる鴎外の付加である。つまり直接話法で書かれた部分であるが、その他に間接話法の部分にも、鴎外の付加が見られる。

〔英文〕... the rain always made a point of setting in just as he had some out-door work to do; (p.35)
〔底本〕… der Regen mache sich eine Regel daraus, immer gerade dann einzureffen, wo er etwas außer dem Hause zu schaffen habe; (S. 60)

〔鴎外訳〕此畑へ仕事に出ると、何時でも意地悪く雨が降る。 (p.170)

主人公リップの怠け者ぶりを描写する場面のように見えるが、実はリップが言い分けをしている箇所である。すなわち、リップの農園では、垣根が破れ放題で、飼っている牛がそこから逃げ出しては農地を踏み荒らし、農地には雑草が生えて、たまさかリップが畑仕事の必要に迫られた時に限って、いつも決まって雨が降り出す、という状況を主人公が説明している部分である。

上に引用した底本では動詞 machen が過去形 machte ではなく、接続法第一式 mache で示されている。すなわち間接話法が使用されているわけであるが、これは上記引用箇所の数行上にある Er erklärte in der That（彼は実際〔次のように〕説明したのであった）という表現と連動しているものであり、説明の内容が数行にわたって示されている。その中に、上記引用箇所が含まれるわけである。

底本では、上記引用箇所は「自分が戸外で何かしなければならない場合、まさにその時、雨が降るのが常でした」という程の意味であって、鴎外の訳文に見られる「意地悪く」に相当すぐ語句は存在しない。

この「意地悪く」という語句は、いわば天を恨む言葉である。底本でも鴎外訳でも、リップは畑仕事が出来ない理由を、雨降りという自然現象に求めている。怠け者が自己の責任を回避するために、自然現象を口実として挙げているわけであるが、鴎外は「意地悪く」という語句を追加することにより、畑仕事をしない理由をリップが雨降りという自然現象になすりつけようとしている、という印象をより一層強調して読者に与える、という効果を生み出している。つまり鴎外は、主人公リップの心情を代弁する方向の文言を付加することによって、怠け者としてのリップの思考回路を――それ自体は独りよがりであるとは言え――読者に印象づけて強調したのである。

以上のように、鴎外は主人公リップの台詞――それが直接話法であれ、間接話法であれ――の中に、主人公の心情を代弁するような文言や、主人公が言いそうな弁解の文言を追加して、いわばリップの心に寄り添うような姿勢を見せているが、そのような例に当てはまらぬものをひとつ発見したので、以下に紹介しておく。

〔英文〕 " ... Does nobody know poor Rip Van Winkle? (p. 48)
〔底本〕 „ ... Kennt denn Niemand mehr den armen Rip van Winkle?" (S. 75)
〔鴎外訳〕「……まあ此多人數の中に、誰もおれを見覺えた人はないか、」と云ひました。 (p.184)

二十年ぶりに下界に降り立ったリップの台詞の部分である。鴎外の付加である「まあ此多人數の中に」の部分は、たしかに嘆息する主人公の気持ちを強調する効果はあろうが、もしも、より強くリップの気持ちを代弁するつもりなら、たとえば「何としたことか」等の文言を付加出来たはずである。それに比すれば、「まあ此多人數の中に」という文言は、主人公の気持ちを代弁するというほどには強くはないと判断される。

この一例からも言えるように、鴎外の追加的文言の全てが全て、リップの心情を代弁するために付加された、ということまでは言えないのである。

３　主人公が置かれた状況の描写

本節で検討するのは、主人公が置かれた状況を描写する部分――つまり、台詞の部分ではなく、地の文における描写――に関し、鴎外が主人公の心情を代弁するような文言を創作的に付加しているケースである。

〔英文〕He now hurried forth, and hastened to his old resort, the village inn; but it, too, was gone.　(p. 44)
〔底本〕Nun jagte er davon und eilte zu seinem alten Asyle, der Dorfschenke; doch auch diese war verschwunden. (S. 71)
〔鴎外訳〕落膽(がつかり)して家を出て、急足で何時もの酒屋に來て見れば、これも何うしたことか消えて仕舞つて、……[1] (p. 179)

長い眠りから覚めたリップが、荒れ果てた我が家を後にして、行きつけの居酒屋を探しに行く場面である。原文の意味は「そこで彼はその場を去って、なじみの隠れ家である村の酒場に急いだ。しかし、これもなくなっていた」というほどの意味である。ことさら主人公の感慨を盛り込むことなく、我が家もなじみの酒場も消え去っていたことを淡々と描写している。その部分に鴎外は、「落膽(がつかり)して」であるとか、「何うしたことか」等の文言――主人公が驚き落胆する様を直接表現する文言――を敢えて書き加えている。つまり鴎外は、底本にない表現を盛り込むことによって、いわば訳者としての分限を越えて、あたかも原作者になり代わったかのごとくに、主人公の心中を慮った表現を付加したのである。

ここに検討した「落膽(がつかり)して」あるいは「何うしたことか」という付加表現は、状況の描写であると同時に、リップその人の心情の描写でもある。つまり、一夜にしてに二十年の歳月が経過したことに半ば気づき始めた主人公の感慨を、直接的な文言で描写していると取れる例である。

上の例は状況描写であると同時に主人公の心情を直接的に述べた例であるが、次に、こうした複合的な描写でなく、鴎外が主人公の心情を端的に述べている部分を検討する。

〔英文〕... and sometimes tripped up or entangled by the wild grape-vines that twisted their coils or tendrils from tree to tree, and spread a kind of network in his path. (p. 42)
〔底本〕... manchmal strauchelte er oder verwickelte sich im wilden Wein, der seine Reben und Ranken von Baum zu Baum flocht und eine Art Netzwerk über seinen Pfad breitete. (S. 68)
〔鴎外訳〕……樹樹の枝に蔓を渡して、往方の途に網を張つた、野生の葡萄が、折々足に搦んで、その困難、實に昨日の比ではありませなんだ。　(p. 177)

主人公リップが酔いから目覚めて、山から下界に降りて行く場面である。この時点で主人公は、昨晩

[1] 鴎外訳では、「消えて仕舞つて」のあとに、さらに訳文が続く。底本ではverschwundenのところで一つの文章が終わり、そのあとで別の文章が続くのだが、鴎外は、新たに始まる底本の文章を、前の文章と一続きにした訳文を作っている。

からまさか一夜にして二十年が経過したとは思っていないし、読者もまだリップが浦島太郎状態になったことを、この段階では知らない。作者アーヴィングは、木々や草が生い茂ったことを描写することによって、二十年が経過したことを暗に示している。すなわち底本では「彼は何度もつまずいたり、あるいは野生の葡萄に足が絡まったりした。葡萄の房や蔓が木から木へと張り巡り、幹の上に一種の網のように広がっていたのである」という描写があり、こうした描写のみを以て、リップの困難ぶりを示しているのだが、鴎外はより直接的に「困難」という語を用い、しかもその程度が極めて大きかった事を示す「實に昨日の比ではありませなんだ」という文言を付加している。すなわち、鴎外は敢えて一文を創作的に付加することによって、リップが遭遇した困難を強調しつつ、かつ、木々の変化がおよそ一夜にして生じたようなものでないことを述べている。

こうしたことは、困難に遭遇したリップの心情に寄り添う描写であると同時に、結末（一夜が二十年であったこと）に関し、原作者アーヴィング以上に翻訳者鴎外が伏線を張った、と言い得る。鴎外はこのように、底本には存在しない、昨日と今日との差を強調する様な文言を付加したのである。

次に見る例も、底本にある状況の描写に加え、その状況を主人公がどのように判断したであろうかという推測を、訳者がわざわざ書き込んだ例である。

〔英文〕 Rip’s heart died away at hearing of these sad changes in his home and friends, and finding himself thus alone in the world. (p.46)

〔底本〕 Rip sank der Muth, wie er diese furchtbaren Veränderungen in seiner Heimat und unter seinen Freunden vernahm und sich so ganz allein in der Welt fand. (S. 73)

〔鴎外訳〕 この恐ろしい世間の更り様、又た友達の榮枯得失を聞いて、自分の唯だ此處に取殘されたことを顧みたリツプの落膽は思ひ遣られます。(p.182)

自分が一晩の眠りと思っていたのに、世間ではその間に二十年が経過していたらしいと気付いた時のリップを描写した場面である。底本は「故郷や友人の変わり様を知り、自分が世間で全く一人取り残されたことに気付いて、リップは意気消沈してしまった」というほどの意味である。つまり、世間が変化し、自分が一人取り残されているという状況の描写に加え、「意気消沈してしまった」という主人公の心理描写も盛り込まれているわけだが、鴎外の訳文では、あたかも鴎外が読者の一人になったかのように、「思ひ遣られます」という、主人公の心情を推測する文言を創作的に付加している。

鴎外はなぜこのような付加を為したのであろうか。底本にあるような、「状況描写＋心理描写」のみでも、読者は十分に主人公リップの当惑を推測し得るはずである。そこに畳みかけるように、更に主人公の心情を推測する、あるいは、いわば外から評するような文言を書き加えることは、訳者の分限を越えた営為といわざるを得ない。そのような付加を敢えてなしたのは、ひとつには、この訳文の初出が『少年園』という少年雑誌であった、ということに求め得るかもしれない。子供向けの話という位置付けであれば、読者が持つであろう所感を敢えて作者が（この場合は訳者が）述べるということは――たとえば、昔話の末尾に「めでたし、めでたし」と、語り手が評語を述べるように――あり得る一つの叙述姿勢であると解せる。

以上は全くの推測であり、本来ならば、鴎外の日記や書簡の中にあらわれた少年読者への言及を探った後でなければ確たることは言えぬわけだが、本論文ではそのような調査のゆとりがなかった。ここではいちおう、発表メディアの違い（それはまた、読者層の違いでもある）によって、鴎外が翻訳の姿勢を微妙に変化させていたのではないか、という推測を述べるに止めたい。

次に挙げるのも、同様の例である。

〔英文〕 "... Why, where have you been these twenty long years?" (p. 48)
〔底本〕 „ ... Nun, wo waret Ihr eigentlich die langen zwanzig Jahre?" (S. 75)
〔鴎外訳〕「……この永の歳月、まあ、何處に居ました。」と云うたが、その時のリツプの嬉しさは、實に思遣られます。 (p. 184)

二十年ぶりに下界に降りて来たリップのことを、もはや誰も知らない、その中にあって、ただ一人老女がようやく、若き日のリップの面影を思い出してくれる、という場面である。老女はリップに、二十年の間どこに居たのかと問うのだが、底本では老女の質問の言葉のあと、すぐに次の場面に移る。ところが鴎外は、次の場面に移る前にリップの心情を述べる文章、すなわち「その時のリツプの嬉しさは、實に思遣られます」という箇所を創作のうえ追加している。

この文章を付加することにより、鴎外は主人公リップの安堵の気持ちを代弁し、村人にアイデンティファイしてもらえたリップの心情を、底本より強調した形で読者に伝えているわけである。（なお、底本では老女が「二十年という長い年月」と述べているところを、鴎外は「この永の歳月」と、具体的な年数を訳出していないが、その様な改変に何らかの必然的な理由があったかどうかは、不明である。）

この例でも、底本では、老女がリップに質問をしたという状況の描写のみが提示されているところを、訳者鴎外が、「嬉しさ」という直接的な評価語を訳文の中に盛り込んで、読者が持つであろう感想を先取りして訳文の中に書き込んでいるのである。

４　評者の顔を持つ翻訳者

鴎外の創作的付加は、上に見てきたように、あるいは台詞の中における主人公の弁解や慨嘆の言葉であり、あるいは主人公の心情に寄り添う形での状況描写であり、さらには主人公の落胆や喜びを地の文の中に書き込むものであったが、「新浦島」の面白い所は、鴎外がこうした次元の――つまり訳者が原作者になり代わったかのような――創作的付加をなすのみならず、訳者鴎外が、いわば一評者としての所感をも訳文の中に書き込んだ、ということである。

〔英文〕 In fact, he declared it was of no use to work on his farm: (p.35)
〔底本〕 Er erklärte in der That, es sei zwecklos, auf seinem Besitzthum zu arbeiten; (S.60)
〔鴎外訳〕 實に妙な性分です。然し其譯を問ふと、何時でも立派に言ひ解きます。私の田を耕す程、世に損なことはない。 (p.169)

これは、他人のためならどんな労苦も厭わない主人公が、こと自分自身に関わることとなると、やれ自分の畑の地味が悪いだの、牛が勝手に逃出すなどと、自己の無為の言い訳をするという場面である。この場面で鴎外は、あたかもひとりの評価者になったかのように、主人公の性格について「實に妙な性分です」と、底本にない文言を訳文に書き加えている。もちろん、これまでの節で見てきたような、原作者になり代わったかのような創作的付加と明確な線引きは出来ないのであるが、前節までに見た諸々の例とは異なり、リップの性格を「描写」すると言うより、その性格や行動を「評価」するといった趣が強い。このような観点からすれば、作者的訳者として「描写」するという次元とはまた異次元の、読者的訳者として「評価」する文言を創作的に付加したものと考え得る。

次に紹介する例も、主人公リップの性格を評価した部分である。リップが、他人の依頼なら何でも喜んで引き受けるが、こと自分自身の仕事となると全く出来ない、ということを述べた後、その理由として次のような文章が続く。

〔英文〕It could not be from the want of assiduity or perseverance; for he would sit on a wet rock, with a rod as long and heavy as a Tartar's lance, and fish all day without a murmur, even though he should not be encouraged by a single nibble. He would carry a fowling-piece on his shoulder for hours together, trudging through woods and swamps, and up hill and down dale, to shoot a few squirrels or wild pigeons. (p.34)

〔底本〕Es konnte nicht aus Mangel an Fleiß oder Ausdauer herrühren; denn er vermochte auf einem feuchten Felsen mit einer Angelruthe, die so lang und schwer war wie eine Tartarenlanze, zu sitzen und den ganzen Tag ohne Murren zu angeln, selbst wenn ihn auch nicht ein einziges Anbeißen ermuthigte. Er konnte Stunden lang eine Vogelflinte über der Schulter tragen, durch Wälder und Moräste, Berg auf, Berg ab traben, um ein paar Eichhörnchen oder wilde Tauben zu schießen. (S. 59)

〔鴎外訳〕それはかれが耐忍力に乏しい爲めでせうか。韃靼人の槍よりも長い釣竿を握つて、息を屏(ヒソ)めて濕り勝な岩の上に坐り、一尾の魚も取らずに、平氣で一日も居るのは、耐忍力ではありませんか。鳥銃を肩に掛けて、沼を渡り、森を穿(ウガ)ち、登りつ、降りつ、幾時となく彷徨(サマヨ)うて、山鳩一羽、栗鼠(リス)二三頭を捕つて、喜んで還るのは、耐忍力ではありませんか。(p. 169)

かなり長い引用になったが、ここではリップの性格に対する鴎外による評価的文言の追加があることの他に、底本の平叙文を訳文で反語疑問の形に変えたこと、そして軽微ながら誤訳が見られることの三点が指摘し得る。

まず底本に存在しない表現を鴎外が創作した箇所について述べる。それは鴎外訳の最後の方にあらわれる「喜んで還るのは」という箇所である。底本では、主人公リップが山野を駆け巡っても、結局僅かな獲物しか取れなかったということを述べているのだが、鴎外は主人公リップがそれでも平気であることを読者に強く印象づけるために、敢えて「喜んで還るのは」という文言を追加した。これは、本節の最初に紹介したほどには典型的な例ではないが、やはり鴎外が、一評者としてリップの愛すべき性格に評価を下した文言の付加であると言える。

本節の中心的課題は鴎外が主人公の性格に評価を下すような文言を加えた、ということの分析であるが、それに加えて、原文の平叙文を鴎外が反語疑問に訳している事も注目に値する。すなわち鴎外の訳文では、たとえば引用箇所の冒頭は「それはかれが耐忍力に乏しい爲めでせうか」となっているが、この部分は原文では「そうしたことは、勤勉さや忍耐力の欠如に由来するものではあり得なかった」という断定調の文章になっている。この箇所を、仮に鴎外が平叙文の文体で「それはかれが耐忍力に乏しい爲めではありませんでした」と訳したと仮定しても、それで――文体の好みはあろうが、すくなくとも意味伝達の上では――何の問題もない。冒頭の箇所以外も、底本では平叙文になっているところを、鴎外はすべて反語疑問に変えている。

そのように文体の変更を行った理由は定かでないが、ひとつの推測として、引用の最後の部分に付加した鴎外の「喜んで還るのは、耐忍力ではありませんか」という評価の調子が、それ以前の純然たる翻訳の部分にまで遡及せしめたためではないか、ということが考え得る。つまり、主人公の心情に思い入れを行う姿勢が、単に創作的付加という部分にあらわれたのみならず、数行にわたる訳文全体のトーン、すなわち文体の変更という点にもあらわれていると目されるのである。

主人公リップに対するこうした思い入れのせいであろうか、鴎外の上の訳文には思わぬ誤訳が見られる。それは「韃靼人の槍よりも長い釣竿」という訳文である。底本 „eine(r) Angelruthe, die so lang und schwer war wie eine Tartarenlanze“の部分（英文では“ a rod as long and heavy as a Tartar’s lance“）は「タタール人の槍と同じくらい長くて重い釣り竿」という、いわゆる同等比較の構文になっていて、初級文法の知識があれば誤訳など考えられない箇所である。つまり在独経験の長い鴎外なら誤訳する筈のない箇所で、このような初歩的なミスが見られる。

これも全くの推測に過ぎぬが、上記の訳文を為すに際し、鴎外は翻訳底本に密着して訳すという翻訳家としての態度をしばし忘却し、半ば作家的に主人公への思い入れを書き込み、そして半ば一評価者としての所感をも述べるという姿勢の中で、底本のもつ言語表現にしっかり目を通すという訳者としての基本姿勢を離れてしまったのではないか。翻訳底本のドイツ語にある Angelruthe（釣り竿）、lang（長い）、Tartarenlanze（タタール人の槍）等の単語にさっと目を通し、あとはリップへの共感のままに、思わず知らず「タタール人の槍より長い釣り竿」という風に、勝手に訳文を作ってしまったのではないか。このように考えると、ドイツ語の達人らしからぬ初歩的ミスの背景にも、実は主人公リップに対する鴎外の思い入れが映し出されていると思われるのである。

５　おわりに

アーヴィングの英語原文と、その独訳、および鴎外訳を対比してみると、アーヴィングの英語原文を独訳者は極めて忠実に訳そうとしているのに比し、そのドイツ語からの重訳を試みた鴎外の日本語訳は、時として自由かつ大胆で、所々に鴎外の作家としての創作的態度があらわれ、さらには、一読者あるいは一評価者としての所感さえ訳文の中に盛り込まれていることが解明された。

こうした比較的自由な翻訳態度が、はたして鴎外個人の姿勢に由来するものであるのか、それとも明治中期の日本の翻訳界の傾向に由来するものであったのか、という問題の解明が次の課題になろう。

明治初期から中期においては、それまで殆ど馴染みのなかった欧米の文学を日本に移入するため、現在の翻訳とはかなり異なった、言わば「日本化」ともいえる操作を施した翻訳が存在した。その際、日本の当時の読者が持っていた欧米の文化についての予備知識の水準にあわせ、さまざまな工夫が見られた。たとえば作品中に登場する人名や地名を日本化したり、当時の日本になかった文物を日本のもので代用して訳したり、はては作品の導入部に敢えて和風の情景を描き込み、さらには自己の政治的信念を訳文の中に盛り込む等々の――今日の「翻訳」の観念からは相当にかけ離れた――営みが見られた[2]。

このような状況の中で、初期鴎外の翻訳を再検討すると、「新浦島」に見られる創作的追加も、鴎外が作家であるから為されたものであるというより、むしろ、明治初期・中期の翻訳者たちの多くが作家的・創作的訳者としての傾向を持っていたと言い得るのであり、初期鴎外の翻訳活動も、そうした全体的傾向の中に置き入れて考察する必要があると考えられるのである。

もちろん、こうした全体的傾向の中に鴎外の翻訳活動を位置づけるという立場に立つ場合において、仮に、鴎外の翻訳の個性を全体的傾向の中にすべて解消し去ったとしたら、それは過度の単純化となろう。主人公リップの心情に寄り添い、その愛すべき人柄を底本より色濃く描き、リップの当惑や驚きを追加的文言を以て強調した鴎外の翻訳態度の中に、日本化とは別次元の方向性が見られることもひとつの事実なのである。

（付記）本論文は筆者を研究代表者とする科学研究費補助金基盤研究（C）「明治期ドイツ学の観点より考察したる森鴎外翻訳作品の史的研究」（研究期間：平成２５年度～平成２８年度）により調査・収集した資料・情報に基づくものであり、上記基盤研究の研究成果の一部をなすものである。

[2] この点については拙論「外国語の学習と翻訳―ひとつの言語文化交流論―」（藤本和貴夫・木村健治編『言語文化学概論』、大阪大学出版会、1997 年所収）を参照。